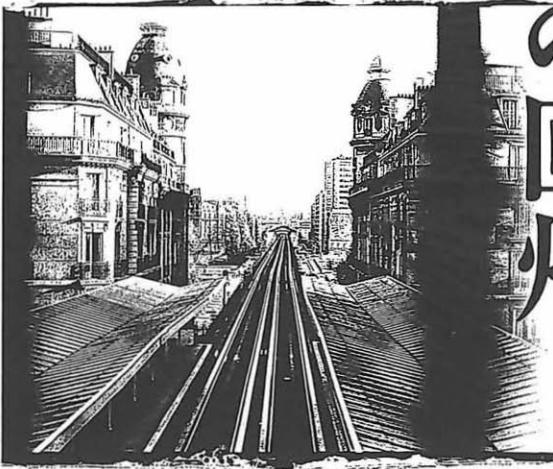


國への憧憬と祖国への回帰

異国への憧憬と 祖国への回帰

Hirakawa Sukehiro

平川祐弘編



Hirakawa
Sukehiro

平川祐弘
編

「ジョセphin・マクラウドヒスター・ニヴェディータ」

平川祐弘編『異国への憧憬と祖国への回帰』、明治書院、2000年、67-101頁。

明治書院

鶴田欣也の靈に捧げる

異国への憧憬と祖国への回帰
* 目次

西洋への憧憬と日本への回帰

——アイデンティティ——発見の法則性について……………平川祐弘

「アイデンティティ」私論……………佐伯彰一

日本への回帰か、西洋への回帰か——ハーンの『ある保守主義者』……平川祐弘

岡倉天心——東洋と西洋のはざまで……………成 恵卿

ジョセフ・マクラウドとシスター・ニヴェディータ

「天心・岡倉覚三」を国際市場に売り出したふたりの白人女性……稻賀繁美

谷崎潤一郎と中里恒子における西洋人のイメージ

鶴田欣也（訳・小谷野敦）

放蕩息子の帰還——永井荷風の西洋体験と日本再発見……………菅原克也

遠藤文学における日本回帰

——愛^{アガペー}とエロスの弁証法をめぐつて……………萩原孝雄

小林秀雄の失われた故郷

ホセア・ヒラタ（訳・大嶋 仁）

185

145

121

103

67

45

27

15

5

東洋の鏡——アンジェラ・カーターと日本

スザン・フィッシュヤー（訳・菅原克也）

カズオ・イシグロにおける「日本の名残」

大嶋 仁

鶴田欣也の生涯の旅

平川祐弘

*

あとがき

平川祐弘

ジョセフイン・マクラウドとシスター・ニヴェディータ

「天心・岡倉覚三」を国際市場に売り出したふたりの白人女性

稻賀繁美

67 ジョセフイン・マクラウドとシスター・ニヴェディータ

天心、岡倉覚三（一八六二—一九一三）の著述には、多くの女性たちの姿が影日なたに付きまと。準備していた東京大学の卒業論文は、幼い妻、もと（一八六七—一九一四）が「ヒスティリー」（？）ゆえに燃やしてしまい、天心は急遽替わりに「美術論」を執筆して、ビリから二番とかで卒業に漕ぎ着けた、とは有名な伝説だ（ところで、その——貴重な——卒業論文は、その後どうなったのだろう）。また天心が最晩年に、インドの閨秀詩人、プリヤムダ・デヴィ（一八七一一九三五）と交わした書簡は、天心の「詩と真実」を余すところなく伝えていて、その感化の程は、大岡信の『岡倉天心』、さらには関係書簡の——いささか感情移入過剰な箇所もないではない——全訳にも明らかだろう。実の母の愛から疎外された岡倉天心における、「母なるもの」への憧憬も、つとに土居健郎やフレッド・ノートヘルファー（Noteholder 1990: 317）に

指摘がある。ボストン時代の天心が世話になつたイザベラ・ガードナー夫人（一八四〇—一九二四）が、天心にとつて「やさしい母親と氣の強い姉とを兼ね備えたごとき存在だった」とする大岡氏の指摘（『全集』七巻解説：409）は、疑いのないところだろう。彼女については、最近シャンディ=トウツチによる評伝が刊行されたが、そこで著者は「オカクラ・カクゾの生涯を通じて、英語での最良の詩はイザベラ・ガードナーに宛てられたものであつた」と認めている（Shand-Tucci 1997: 254-257）。トウツチは、天心が没年に彼女に献呈した戯曲、「白狐」“White Fox”的ことは、見落としているが、その代わり、天心がガードナー夫人から贈られたペルシア猫、孤雲（陶淵明の詩句による命名）、通称「コーチャン」に託して己が晩年の心境を述べた手紙（一九一年一〇月四日付）は、忘れず全文を引用している。「君もわたしも知つてゐる、驚きこそが至福の秘密であり、また理性とともに、麗しきものに死が訪れるこことを」との一節も見える、特異な書簡である。

はたして天心は、誰を思つて英文の著述に打ち込んだのか。画家ジョン・ラファージに献じられた『茶の本』（一九〇六）の場合、その最初の読者は、ほかならぬガードナー夫人だつたろう。この時期、彼女がイタリア・ルネサンスを専攻する美術史家にして鑑定家、バーナード・ベルソンに宛てた書簡には、「昨日夕方の五時に、オカクラの手で、蠟燭の灯火のなかで催されたすばらしき Tea Ceremony “チャノユ” の、あの気分と華とが、いまだにわたしを包んでいます」

(一九〇五年一月二二日) といった記述のあることも知られている。どうやら天心は、かれの周囲に居た女性たちを想定して、その多くの英文の著述をなしていた節がある。以下、このような天心における「甘えの構造」に、今まであまり触れられることのなかった女性を、さらにふたり付け加えてみたい。ひとりは、ジョセフィン・マクラウド、いまひとりはシスター・ニヴェディータ。このふたりの女性なくしては、おそらく我々が今日知るような国際的著述家、天心は存在しえなかつたのではないか。そして彼女らとの交友の延長に現れたのが、天心晩年のガードナーフ夫人であり、プリアム^{パウル}・デヴィだつた。これが、以下論証してゆきたい仮説である。

近代日本の外向きの顔を一面で代表する天心の英文著述は、実はこれら外国人の女性たちによつて、支えられていた。その「妹の力」は、二十世紀初頭アジアにおける国民意識を陰で育み養う、国際的な媒介役だつた。植民地下のインドと、辛くも独立を守りながら、その代償として、日露戦争を契機に帝国主義の仲間入りをし、いわばアジアの隣人たちから変節を遂げるほかなかつた日本と。その両者を、密かに仲立ちする役割を負つたのは、アジア人ではない異国の、それも女性たちだつた。だが彼女らこそが、近代日本の、そして近代アジアの女性たちの「声なき声」を担い、「語り得ぬ実存」を代弁していくのではなかつたか。

天心の最初の欧文著作となつた『東洋の理想』（一九〇三）は、天心が外国人の女性たちを相手に東京谷中の自宅で行つた、日本美術史にかんする内輪の講義が基になつてゐる、といわれている。ジョセフィン・ハイド Josephine M.Hyde (生没年未詳) とともに、それを聴講したのが、ジョセフィン・マクラウド（一八五八—一九四九）だつた。ニューヨークの富裕な家族に生まれた彼女は、一八九三年、シカゴの世界宗教會議で一躍注目を集めたヴィヴェカーナンダ（一八六三—一九〇二）に帰依し、その活動を物心両面から積極的に支援した人物として知られる。彼女の、世界を股に掛けた活躍ぶりを伝える逸話には事欠かない。いずれも宗派関係者による編纂物からの引用なので、多少割り引いて考える必要はあるだろうが、例えばロマン・ロランをして、『ラーマクリシュナとヴィヴェカーナンダ』（一九二七）から『ガンディー』に至る四巻のインド関係の書物を執筆するように働きかけたのも、このマクラウドだつたらしい。英語をまったく解さないロマン・ロランは、もつぱらマクラウドとの会話や、彼女が贈つたヴィヴェカーナンダ関係の書籍を、自分の姉妹に読んでもらうことで、これらの著作をものした、という。ミルチャ・エリアーデもその『自伝』で、この事實を知つた驚きを書き留めている。さらにギリシアの作家、ニコス・カザンツアキスを、かつてはシェイクスピアの娘のものだつたという、ストラ

ツトフオード・オン・エイボンの館に招き、『英國』を執筆させて、かれを国際作家として売り出すのに貢献したのは、一九三八年のこと。当時マクラウドは八十歳を越えようとしていた。

『英國』には、作家によるマクラウド晩年の生き生きとした肖像があるが、「習うことが私の宗教」と笑うこの「青い目と立派な顎に思慮深い微笑」を絶やさぬ老嫗の、子供のような知識欲に、カザンツアキスは驚嘆を隠さない (Atmaprana 1995: 109-110)。

一九〇一年一月に日本を訪れて、天心とヴィヴィエカーナンダを結び付けることになったのが、天心より四歳年上の、この女性だった。彼女こそ天心をインド旅行へと誘った張本人にほかならない。天心は同年十二月五日に門司から常陸丸に乗船してインドへと向かう。同じ船には、横浜から僧侶の堀至徳（一八七六—一九〇三）、神戸からはマクラウドが乗船していた。^[注1]

マクラウドとその周辺のお膳立てにより、一行のカルカッタ到着当日の一月六日に、天心はヴィヴェカーナンダとハウラーのベルルの僧院で会見を果たす。天心書簡には「師は氣魄学識超然抜群一代の名士と相見へ五天到處師を敬慕せざるはなし」云々と見え、「師は大乗を以て小乗に先んじたるものと論じ（中略）東西を湊合して不二法門を説破す 議論風発古大論師の面目あり実に得難き人物と存候」（天心書簡 織田得能宛 全集 第七巻 書簡 一五五信）という記述からも、両者の意気投合ぶり、そして天心の不二一元論advaitism教義への即座な感応ぶり——これは『東洋の理想』で展開される——が伺える。ふたりを引き合わせた当時を回想して、

マクラウドはこう語っている。

「人生で一番幸福だった瞬間のひとつといえば、ベルルの僧院で、オカクラさんが、どつちかといえば突つ懃貪に、こう言つたときかしら。『ヴィヴェカーナンダは私たちのもの。彼は東洋人。あなたたちのものではない』、と。それで「ヴィヴェカーナンダと岡倉の」ふたりのあいだには、本当の理解があつたのだと分かりました。それから一一二日たつて、スワミ「ヴィヴェカーナンダ」が私にこう言いました。『久しく失われていた兄弟が戻つて来たようだ。』でもスワミが、『我々の仲間に加わらないか』と尋ねると、オカクラさんは、「いや、まだこの世の始末がついていないから」と断つたものでした」(Atmaprana 1995: 104)。

内容の正確さには、若干保留が必要だろうが、マクラウドの伝記に繰り返し引かれる回想だ。宗教への道を勧めるヴィヴェカーナンダの申し出を断つた天心の「この世の始末」のなかに、マクラウドの伝記作家たちは、あるいは、アジアの連帯を説く革命家としての天心の使命、あるいは、日本の伝統美術を現代に蘇らせる日本美術院の事業が、まだようやくその端緒についたばかり、という天心のおかれた状況を読み込んでいる (Prabuddhaaprana 1990: 123)。もともと日本側から見れば、事情の詳細はいささか様相を異にする。天心のインド行の背景には、(1) 中国

旅行に継ぐ、インド古美術の実地検証への意欲、（2）日本仏教界でのインド、チベットへの関心の高まりとの連動（能海寛のチベット潜入が一八九九年、河口慧海、大宮孝潤のインド入りは一九〇一年、大谷光瑞の中央アジア経由のインド入りも一九〇二年）、といった積極的な理由のほかに、（3）日本美術院の行き詰まり——その舞台裏は留守を預かった塩田力藏の告白、「鳴呼日本醜聞院」に詳しい——や、九鬼男爵夫人波津子との恋の破局からの逃避行、といった消極的な動機も否定できないからだ（岡倉 1987: 6）。

2

美術における天心の活動と、ヴィヴェカーナンダの精神世界での事業とのあいだには、東洋人による西洋へ向けた発言、という共通性が容易に見て取れる。だがそれだけでなく、すでにインド旅行の前年から天心は織田得能と語らつて、ヴィヴェカーナンダの日本招待を画策し、さらには世界宗教会議を京都で実現するという夢にも取り付かれていた。織田あて書簡には「出来得べくんば小生帰朝の際同伴可致考に候」（同上）とも見えるが、この夢は結局、一九〇二年七月四日のヴィヴェカーナンダの死去（当時三十九歳）ゆえに実現しない。

だがむしろこの文脈で示唆しておきたいのは、天心が自らの活動において、ヴィヴェカーナンダのシカゴ宗教会議（1893）での伝説的な成功（Vivekananda 1994）に、何らかのかたちで肖

ろうとしたのではないか、という推測である。本論の主旨から逸脱するので一言示唆するに留めるが、セントルイス博覧会での天心の講演、「日本の見地より觀たる近代美術」(1904: Okakura 1905) の立論に、ヴィヴェカーナンダの十年前のシカゴ講演と共通する論法を探し求めることは困難ではない。アジア文明に均質性、それも「内部から実現された」均質性、を認め、「東洋思想の一元的傾向」を指摘する天心の姿勢。そこには、『東洋の理想』冒頭の「アジアはひとつ」が、ヴィヴェカーナンダの不二一元論に裏打ちされていた様も透けて見える。欧米にたいしてアジアから発言しようとする両者の態度には、明らかに共通する基底が認められる。^[注2] と同時に、すでに大久保喬樹も指摘したとおり、天心がadvaitismを解釈しなおした論点もあるだろう。ヴィヴェカーナンダが一元的全体論の立場から、諸宗教の寛容と融和的統合による「普遍的宗教」を説いた (Biswas 1994: 195-210) のに対して、天心はそれを逆に、強引にも、歴史上の発散と結合の現象学へと鏗直し、アジアにおけるその地勢学的究極として、日本の文化史的意義を確認する。「古きを失うことなく新しきを受け入れる、不二一元論の生きた精神」(Okakura 1908: 8) と読み替えることで、日本におけるインド、中国その他の要素の統合にこそ、「東洋の博物館」の具現を見る思想へと、我田引水よろしく接ぎ木される (柄谷 1999)。

いずれにせよ、このようなふたりの知的な交歓を裏で演出したのが、ジョセフ・マクラウドにほかならなかつた。だがさらに大切なのは、彼女がまた、シスター・ニヴェディータ終生

の、そして最良の文通相手だつたことだろう。このふたりの関係がなかつたならば、『東洋の理想』が、今日知られるようなかたちで出版されることも、ありえなかつたからである。

3

ニヴェディータは『東洋の理想』に貴重な序文を寄せたことで知られている。岡倉天心は『茶の本』の冒頭でも、ラフカディオ・ハーン『小泉八雲とならべて、ニヴェディータの著作「イン・生活、その縦糸横糸」に言及し、それらを、「我々東洋人の琴線をもつて、東洋の闇を照らす稀なる灯火」に譬えている。シスター・ニヴェディータ（「献心」を意味する）、本名マーガレット・サミュエル・ノーブルは、アイルランドの出身（一八六七—一九一一）。一八九五年にロンドンでヴィヴェカーナンダに会つて以来、その教えに帰依し、九八年から、カルカッタに居を移していた。二巻一千ページを越える彼女の膨大な書簡集を繰つてみると（Nivedita 1982: 予告される第三巻は未確認）、その三分の一を占めるマクラウド宛の文通のなかに、インド滞在中の天心一行の動向も、頻繁に報告されている。天心のインド旅程には、すでに堀岡弥寿子による詳細な復元がある（堀岡 1982; 岡倉 1987: 14）ので、以下そこには触れられていない情報に限定して、いささか状況を追補したい（なお書簡編者によれば、天心とニヴェディータは、すでに一九〇一年以来文通を開始したらしいが、これを裏付けるような手紙は、現在までに公刊されている

書簡集には収められていない)。

天心とニヴェディータとの会合が確認されるのは一九〇一年三月。四月十九日の手紙で、ニヴェディータは天心のことを「犀」(Rhinoceros)と呼び、織田得能も加わった一行のことを、「山賊の親分とその一味」(Chieftain and his party)などと愉快に記述する。この日ブッタガヤ Buddha Gaya 田舎アーラムにて出発した一行は二十八日にハウラーに帰着するが(『堀至徳日記』)、ニヴェディータは五月一日マクラウド宛に「山賊とその一味には、ブッタガヤでの生活は恐ろしい熱暑だったとか、四月一八日の月曜に、わたしが着付けをしている最中に、天心は突然ここにやつてきました」と書き送る。「インドで旅行を組織するとなると、その手間といつたら」といつた不平も漏らしながら、「犀はいたって元氣」と、マクラウドを安心させる言葉も忘れない。七月二日のバグ・ガザール Bagh Gazaar からの手紙には「貴女のお友達が、こんなに生き生きとして打ち解けたのは見たことがない。たぶんわたしの周囲が我慢できる様子だと思ったからでしょうかけれど、でも彼、ほかならぬ彼が生きている、あの希望の土地【日本】のことを話しあじめて——それも、ある意味では、わたしには心地よかつた」とある。

日本に東洋の希望を見いだす天心の姿勢——先に引いたマクラウド自身による天心の回想にも呼応する一節だが、それは単なるお国自慢ではなく、ヴィヴェカーナンダもまた認めるに吝かでないところだった。実際、シカゴ万国博覧会への参加途上、ヴィヴェカーナンダはわざわざ神戸

で下船し、陸路横浜まで旅しているが、その際の日本の印象を故郷に書き送つて、「日本人は時代の要請に完全に自覚しており」、通信、交通機関など社会制度の整備や軍備に至るまで、「近代化」に邁進する一方、また「日本人は地球上でもつとも清潔な民のひとつだ。すべてがきちんと小されいになつてゐる」と感嘆を込めて観察していた。七月四日の師の死去に繼ぐ時期の手紙で、ニヴェディータは「わが祖国はほかならぬその子供たちの墓場と化し、彼女「インド」に暴行を加えるありとある暴漢たちの天国となつてゐる」というヴィヴェカーナンダの嘆きを書留め、師が自分の弟を「アメリカか日本へ、とにかく、どいかベンガルの外へ Anywhere out of Bengal」に派遣したい、との希望を漏らしていたことを記録している（一九九信 一九〇一年七月二八日）。「言うまでもなく、再生を果たした若き日本の愛国的な熱狂と、その対極で、国としてのまとまりを失つたインドの、自己アイデンティティへの深い危機とは、結局のところ同じコインの両面に他ならない」（Guha-Takurta 1992: 182）。だが、天心自身がこの両面の価値のあいだで揺れ動いてゆく」とも、見逃してはなるまい。

4

九月十四日付の長い手紙で、ニヴェディータは『東洋の理想』に言及し、編集者が「原稿を切り刻む」という自由裁量 discretion に及んだことを打ち明けている（110七信）。「最初の切除は

どうみても、とりわけ不運なもので、全体の音楽を台なしにしてしまったので、試し刷で文章を元に戻しました。こんな自由裁量は、もう願い下げ。貴女はわたしの序文に満足してくれると思います。〔出版社の〕マレーも」(Nivedita 1982: 506)。この証言は、『東洋の理想』の発刊にあたって、ニヴェディータの関与がいかに深かつたかを示している。^[注3]なおニヴェディータの『書簡集』の年表では、ニヴェディータは同年三月には、天心の手稿の書き直しに着手し、八月には序文を脱稿した、との記載が見えるが、その裏付けは不明である。

これと同時に、ニヴェディータは天心が別の原稿に没頭していることも伝えている。「東洋の覚醒」と名付けられることになる、天心生前には未公刊に終わつた原稿を指すのは疑いない。「彼はあいかわらず一所懸命に仕事をしているのでは、と心配です。小さなことにもあれ、大きなことにもあれ、これは燃えるような自己犠牲です。そのことに無意識なあまり、あれほどまでの尊敬を誘います。いいえ、本当に、貴女が連れてきたあの男の偉大さを悟るのに、助けなど、まつたく必要ではありません」(九月一四日：Nivedita 1982: 504)。執筆に倦んだ天心は、しばしば予告もなくニヴェディータのもとを訪れている。「来るとなれば、かれをソファで何時間も黙つて横にさせておきましょう。仕事のかわりに休息し、家庭生活を楽しんで。彼あての貴女の最新の手紙を読んであげるつもりです」。このころまでには、天心はニグ Nigu と親しげに呼ばれ、ニヴェディータとマクラウドとの手紙の中では、大文字の「彼」がこの世を去つたばかり

のヴィヴェカーナンダを、小文字の「彼」が天心を指すまでになる。「ニグとわたしは遊びをして、彼は悪い子供で、その傍らの『素晴らしいお母さん』というのが、ほかでもない私です」（九月一〇日：Nivedita 1982: 503）。ニヴェディータが、天心の「甘えの構造」を自覚して相手をしていたことも明白だが、彼女はまた、天心が「かれを本当に知っている皆から礼拝され」地域の子供たちから「クリシュナ」とまで呼ばれていることを報告している。

天心は一九〇二年十月十六日に帰国の途につくが、この先ニヴェディータは、さらに天心の事業への参画を求められることになる。十一月のマクラウド宛書簡からは、天心が（おそらくは死去したヴィヴェカーナンダの代理として）ニヴェディータの来日を要請していたらしい様子が窺われる。「わたしの小さな子供 little one のための日本について。あの話はニグが考えたのだとと思う。でも私たちのあいだでは、一度も話題にならなかつた。もしそうならば、この話は彼からおのずと自発的に来て欲しい。あんなに寛大で思慮深い人だけれど、同時にニグほど自分の思いのままに人々を動かす力をもつた人を知りません。でもここまで強いられて、説得されるとなると、たぶん彼のこと嫌いになりそう」(一一二信：Nivedita 1982: 518)。それに加えてニヴェディータは「いつたい私が日本に行くなら、それは『東洋人』としてでなければなりません」と宣言する。ヴィヴェカーナンダは東洋人であつて、あなたがた西洋のものではない、と天心が言つたという、マクラウドの回想とも響き合う発言といつてよい。

この時期天心は、織田得能と計った国際宗教会議の開催を諦める瀬戸際に追い詰められた。ニヴェディータの続く手紙には、「天心の度重なる懲罰への懸念と、事業の失敗を見越すような予見が語られている。「[彼の病気のせいもあって、」N.「ニグ」は事を組織するのに、思つていたよりもっと大きな困難にあうかも知れません。」）ちら「インド」でのかれのすべての努力と健康の悪化のあとに、一年か二年静かな仕事が続く、というのなら驚きはしないでしょうが」（一九〇一年一月一九日：Nivedita 1982: 519）。それに続く一節は、ふたりの協力関係の微妙さを伝える。「それに我々の友情と信頼はとても貧しいし、齋された助力も貧しいのです。いかなる良き仕事も、かれにとつて母なる仕事 [Mother's work] だと、我々に感じることができないならば」。

ここにも現れる、大文字で記された「母」の形象は、ニヴェディータの宗教観との関連でも重要だろう。個人的にはラーマクリシュナに寄り添つた「聖なる母」、サラダ・デヴィに仮託され、より抽象的には彼女の理解するヒンディズムの根幹に関わるのが、「母」なる形象であつた。すでに一九〇〇年に出版していた『母なるカーリー』や、一九〇三年七月には脱稿する『インドの生活、その縦糸横糸』に集められる、インド社会における女性の役割をめぐるニヴェディータ考察とも響き合う。なお、この書簡やその前後のやり取りから、日本の将来を考える天心と、インドの将来に思いをはせるニヴェディータとのあいだで、理想に齟齬が生じてきた、とする推定も

ある。実際、『書簡』編者は、この手紙を根拠に、ニヴェディータは「天心のインドでの革命運動の背後にいる意図に懷疑の念を抱いた」とする解釈を与えている(Nivedita 1982: 39)（その当否や背景については、後ほど検討したい）。

一九〇三年（時期は不確かだが）、ようやく『東洋の理想』が出版される。ニヴェディータによると、宛て名不明で欠損のある手紙（一九〇四年と推定）に、以下の言及がある。「△存じでしょか。スマッシュ〔ヴィヴィエカーナンダ〕△それが、小さなカーリーの本「右に述べた『母なるカーリー』」の著者のように、私には思えます。そのあと、私は子供を助け〔ニヴェディータの経営した女学校のことか?」、ついで『東洋の理想』を、そして△の三つのお召し使えの後にようやく、我々は——あなたも私も——△の本を作ることが許されたのだ、という△とを「△の本」は、おそらくニヴェディータの△串田の著作、一九〇四年に公刊された『イハムの生活、その縦糸横糸』を指す】。△れは長いお勤めと助力から育った花なのだ、と思いたい。なによりもまず、はじめて彼「大文字・ヴィヴィエカーナンダを指す」のために何かをしたのだ、と思いたい。それがすべてを聖別します。△とに、お勤めをしたのだという考え方そのものが、私の思うには聖別の覆いのようなものです。とはいっても聖なるものとは掛け離れたものでさえ、もつとも聖なるものにおとらず聖なのですが」(III-1五信 Nivedita 1982: 705-6)。△には、『東洋の理想』がニヴェディータ自身の著作活動とも匹敵する重きを担う仕事だったことが示唆されてい

る。やがて同一の手紙には、欠損に続いて、「OK [岡倉] 氏から甘い手紙 a sweet letter — またしても子供っぽい childish — 来信 — おそらくこれが書かれたときにはいかなる誤解の暗雲もなかつたのだろう、ということを意味しているようですが」、とある。残念ながら内容が十分には読み難く、また天心の手紙そのものも発見されていない様子だが、ふたりを包む状況を推定するためには、このあたりでニヴェディータとインド国民運動との関連に視点を移す必要があるだろう。

5

ニヴェディータは、既に一八九九年には「ヒンドゥー女性の理想」(The Ideals of Hindu Women)、「母なるものの崇拜」(Mother Worship)などといった論文を出版していたが、これらは一部で高く評価されるとともに、一部——とりわけキリスト教に改宗したパンディータ・ラマバイの支持者など——からは痛烈な攻撃にさらされていた(Nivedita 1967: 139)。一九〇〇年に出版された『母なるカーリー』は、こうしたキリスト教宣教師たちが、カーリー信仰を生け贋を要求する「野蛮な偶像礼拝」と見なすのを、「党派的な勝利を目指した中傷」であり、そうした解釈こそ「世俗的な煩惱」の証拠だ、として退け、髑髏に覆われ、ヴィシュヌ神を踏み敷いた漆黒のカーリーの姿の背後に、破壊と死のおぞましさを通して「仮象の彼方の精神的真実」を透

視するとともに、男性原理を包含しつつそれを越える大いなる母なる姿の可能性を認め、そうしたカーリー神への崇拜に、自己犠牲を介した宗教的真実への導きを見ようとする。

所有を求めずひたすら与える母のイメージと、母子の絆の強さとは、『インドの生活、その縦糸横糸』のなか一章、「東方の母」でも一貫して述べられ、これらの著作は、インドの近代的国民意識形成の核に、「母なるインド」という像を根付かせるのに大きく貢献した、とされてきた。天心も高く評価したこの本は、出版当時から一方で、インドの生活に肌で接した感受性と、その内面への洞察に溢れた共感とを示して蒙を啓くもの、とする評価をうけた。だが、他方宣教師よりの立場からは、この書物は学術的正確さや必要な文献批判に欠け、歴史的理解にも欠落が多く、インドの女性たちが実際に置かれた抑圧的状況を、詩的な叙述で甘ったるく美化して肯定する、観念的な理想化にすぎない、かかる忌まわしき停滞からインドを救うのはキリスト教だけだ、とする——ラフカディオ・ハーンに対する宣教師たちの中傷にも酷似した——激しい攻撃に晒されている (Nivedita 1967 vol.2: x-xii)。

これにあい前後して、一九〇〇年から、ニヴェディータはクロポトキンの社会主義思想の影響を強く受け始める。実際、天心との接触の始まる一九〇一年には、直接クロポトキンと会見し、意見を交換している。やがて一九〇二年に天心がカルカッタに到着する少しまえには、「狼たちに囮まれた子羊たち」という題名の論文を公表し、ニヴェディータは宣教師たちの活動を正

面から非難していた。天心の前に現れたニヴェディータとは、このようにインドの社会改革と女性教育に心を碎き、イギリス帝国の植民地支配への反感を急速に強めつつあった、当時三十四歳の白人女性であつた。それはまた、ニヴェディータがすでに、ヴィヴェカーナンダに帰依した、一アイルランド女性という立場から脱皮し、インド解放のための——非合法活動も厭わぬ——政治活動に挺身し始めていたことをも意味している。

注目すべきは、こうした彼女の反英姿勢を強めた政治的傾斜に、ヴィヴェカーナンダが必ずしも同意していなかつたことだろう。まず民衆の精神的な準備こそ優先すべきだと諭して、性急な政治活動には難色を示す師との見解の相違が——天心在印中の——三月には表面化した様子が、書簡からも窺われる。同年七月一日の師の死去からほどない七月十九日には、彼女の仕事は今後ラーマクリシュナ協会の裁可や権威とは完全に独立したものである、とする署名入りの広告が新聞に掲載される。ここには、官憲からのありうべき追及に教団を巻き込まないようにしたい、という彼女の配慮とともに、ヴィヴェカーナンダ死後の教団首脳部とニヴェディータとの見解の相違、さらに急進的な革命分子とも連絡を持つに至つた彼女の政治活動が、教団内部ではもはや處理しきれないような状況が生まれていた様子も窺われる (Mukherjee 1997: 223)。

ニヴェディータが天心の『東洋の理想』の序文を執筆した（八一九月）のは、まさにこうした彼女自身の活動の転機にも重なっていた。そして興味深いことに、この時期、ニヴェディータがボンベイ、マドラスなど各地で精力的に行つた講演のひとつ、「インドの統一につづて」(The Unity of India) などでは、聴衆に、インドの国民的統合を訴えるのみならず、「有機的な統一(organic unity) を語くな」と天心の著作と競合した意見表明が見られ、注目される (Nivedita 1975: 327-8)。そうしたなかで、天心との意見の相違を匂わすちよつとした遣り取りが、マクラウド宛書簡に記録されている。談たまま英国王室に話題が及び、エドワード七世（一八四一—一九一〇）の「不運」——母ヴィクトリア女王没（一九〇一）後に王位継承——にまつわる最近のゴシップが取り上げられたところで、天心が口を挟み、「君主というものが、みんなでも野卑で成り金で権力の誇示にのみ耽つていたわけではないのだ」と云ふとを、「天心は」私にほとんど納得しおせた」という（一九〇二年七月・一九七信）。「それでもヴィクトリア朝英國の、あの際限ない富と詔いと、至る所ぎくしゃくした男どもの活動のさなかでは、プリンス・オヴ・ウエルズの不品行だつて、咎め立てられるべき筋合いではないやしょう。我が王室は、およそ想像できる限りの帝国体制中、もつとも最適な最高峰、と私の目には写るのですから」とニヴェディータ

イーダは、手紙を宛てたマクラウドに同意を求め、英國王室批判の皮肉な舌鋒を和らげない。

アジアの君主には正道を貫く名君もある、とする天心の反応は、『東洋の理想』のなかで、天心がアショカ王の治世を言祝ぐのについて、日本の覚醒に果たした皇室の意義を高く称えた一節 (Okakura 1903: 238-9) とも、明らかに響き合う（執筆との前後関係は不明だが）。

「アジアの栄光は（中略）すべての人の旨を脈打つ平和の鼓動の中にある。帝王と田夫とを合一させる調和のなかにある。あらゆる共感、あらゆる礼讓をその結果たらしめるところの、崇高な同心一体の直観の中にある。これがために日本の高倉天皇は、貧しき民草の爐邊に冷たく霜が降りてゐるからと言われて、ある冬の夜に寝衣をお脱ぎになつたのである。あるいは、唐の太宗は、民が飢餓に苦しんで悩んでいるゆえをもつて、食を捨てたのである。それはまた、菩提薩ぼだいさつ埵を、宇宙の塵の最後の一粒までが先に至福に参入しあわらぬうちは涅槃に入ることを拒んでいるものとして描く、自己放棄の夢のなかにある」。（『東洋の理想』明治文学全集版 富原芳彰訳 五八頁。但し「高倉」は「後醍醐」とあるべきもの）

インドがその統一の理念、機軸を古代ヴェーダという、いわば虚構に求めたのに對して、天心は、十九世紀初頭からの「神道の復興」(recurrent of Shintoism) に明治維新の精神的背景を認めていた。ニヴェディーがインド植民地支配者としての英國王室を批判したのとは対照的に、天心が万世一系の皇室にこそ、東亞の生ける機軸を見いだす、という「敬神家」ぶりを發揮しえ

たことは、否定できまい。イギリスによる被支配という現実にしか統一の（否定的というほかない）原理を見いだせないインドの分裂と混迷を目にのするにつけ、天心の目には「統一」の契機が実在する日本の、アジアにおける文明史的使命が、それだけ誇らしくも確かなもの、と映じたのだろう。インドの革命運動を支援すると思われた天心が、実は「日本政府の手先」だったといった風評を残すことになる一因、そしてニヴェディータとの「見解の相違」なるものの起源も、あるいはこのあたりに探られようか。

その後、一九〇五年のベンガル分割令を契機に、英國製品のボイコットを初めてとして、いわゆるスワデシ運動が高揚を見る（「スワ・デシ」は自國産品を意味する）。そのなかでニヴェディータの果たした役割は、周囲の政治的思惑ともからんで、毀譽褒貶さまざまに解釈されてきた。あるいは——天心も絡めての——非合法革命運動との関連。あるいは総督府首脳との個人的人脈から、手紙を検閲されても平然と官憲にやり返す特権階級ぶり——検閲はかまわないけど、見た手紙は必ず忘れず封に入れて返してくださいね、などと明け透けに断つた手紙も存在する。そのなかで、彼女は、やがて国民的英雄——「インドのジャンヌ・ダルク」あるいは「インドの母」、「民衆の母」——たる寸法までも担つてゆくだろう。詩人、ラビンドラナート・タゴールは「彼女以前に、我々は母なるものの精神の具現 embodiment of the spirit of motherhood を目にしたことはなかつたが、それは家族といふ限界を越えて、それじたいインド全国民 whole nation へ

と広がりうるものだつた」と述べている (Atmaprana 1995: 201)。その彼女にとって、天心の『東洋の理想』における「アジアはひとつ」という宣言が、彼女自身の「インドはひとつ」なれ、という政治スローガンとも共鳴して解釈されていたことは、疑いえない。

ニヴェディータこそがインドに国民意識の理想を植え付けた、とする、インド独立後一時は広く流布された定評——彼女の肖像を掲げた記念切手も作られた——は、たしかに歴史的な検証には耐えない神話であつたかもしれない (Mukherjee 1997: 223)。また、彼女の観念的な母なるインドの理想視には、それを高く評価する立場とともに (Jayaraman 1991)、マルクス主義系の学者から、経済的現実への無思慮が指弾されてきたし、近年ではフューリズムの立場から、異議が唱えられる状況も生まれてきた (Roy 1995)。象徴的な次元でみれば、豊饒と残虐の黒い母カーリーが、植民地側に属する異国から到来した——とはいえ、大英帝国に支配されたアイランド出身の——白人女性の献身と自己犠牲のうちに、己が化身を見いだした、とも言える (cf. Kapoor 1999)。植民地構造の提喻とも読める、この捩じれた支配／被支配関係は、ラーマクリシュナからヴィヴェカーナンダへと継承されたヒンディズムの近代的更生を司る宗教実践や神秘主義思想とも無縁でない (玉城 1965)。そこには植民地インドにおける宗教的師弟関係のジエンダー・ポリティックスの仕組みも重なる。ニヴェディータ神話は、文化的、エスニックな精神分析をも要請して、なお未解決の課題を秘めている (中村 [注4] 1996)。

今日「東洋の覺醒」と呼ばれる原稿、"We are one"が執筆されたのは、天心が、このような反英國感情の高まりと国民意識高揚の感じられるカルカッタに滞在中のことだつた。

この原稿は、すでに触れたとおり、天心の生前には終に刊行されることはなく、一九三六年、天心の孫、岡倉古志郎氏によつて再発見され、まず一九三八年に日本語訳が発刊され、ついで一九四〇年六月に英語原文が、浅野晃校訂により、聖文閣から刊行された。この年がいわゆる皇紀二千六百年にあたることからも、この原稿の出版が「時局がらみ」だつたことは疑い難い。その文脈で読むならば、歐米列強の帝国主義を糾弾しつつ、アジアの連帯を説くこの原稿は、まさに超國家主義を代弁する典型的な扇動政治文書として読まれ得る「今日性」を宿した文章だつた。そして実際この著作は、戦時中日本の軍事的膨張を肯定する文脈で利用された（佐藤信衛『岡倉天心』昭和一九年刊行など）。また戦後はそれゆえに、大東亜共栄圏構想と結び付けて、批判の対象とされる場合が少なくなかった（竹内好「[1966]」、宮川寅雄「[1967]」らの解釈がその典型）。とはいへ、天心の元来の意図は、やがてスワデシ運動へと発展する、一九〇二年現在のベンガルにおける国民意識の高揚のなかでこそ、理解されるべきではなかつたか。

実際、日本における国粹主義者、超国家主義者としての天心像は、インド側からの革命家とし

てのイメージと対極をなす場合が少くない。社会史、政治史を専攻する、ジャスレ・ムケルジ^モは、「ラーマクリシュナ協会によつて発刊された関係文書の誤解や誇張」を批判する一方で、ニヴェディータのアイルランドにおける家系を重視し、彼女のシン・フェイン党との繋がりを強調し、それがスワデシ運動とほとんど同様なものだた、と規定する。そうした前提に立つたうえで^{カク}、かれは、「アナーキストの指導者クロポトキンや日本の革命家、岡倉との接触が、ニヴェディータをして確固たる国民主義の闘士に仕立てた」といつた見解を示している (Mukherjee 1997: 222)。これまで我々がニヴェディータの書簡を手掛かりに検討してきたところに照らせば、このムケルジ^モの見解は、天心のニヴェディータに対する影響を、いささか教条的に誇張したものといわざるを得まい。だがむしろここで注目したいのは、天心の国粹主義が、著しく革命的な性格をもつ宣言として受容されうるような環境が、大英帝国植民地下のベンガルに存在しえたのみならず、そうした解釈が、その時代を研究する今日の学者の見解としても、確固として存在し続けている、という事実である。ニヴェディータの天心との行き違いが、あたかも革命にする方針の違いであつたかのように「理解」されてしまう環境も、あるいはこうした政治風土と無縁ではあるまい。そして、「革命家・天心」という表象の存在そのものも、インド政治史の現実の一斑を構成している。こうした政治環境を生きた天心は、事後インドでいかなる意味付けを蒙つたのか。現時点では、その研究はなお不十分^[註5]だ。

“We are one”」の原稿が、タゴール一族のひとりで、当時もつとも武闘革命的な見解に近づいていたスレンンドラナートたちとの意見交換のなかで執筆された、との証言は既に広く知られている (Tagore 1936: 237; 大岡 1975: 186, 199)。またすでに見たとおり、その手稿にはニヴェディータが直接手を加え、それをさらに天心が再考していた様子も、現在残されている原稿から窺える (岡倉 1987)。ほとんど扇動的な文体で、インドの同胞に対し、革命の武装蜂起を説くに等しい激烈な論調。『東洋の覚醒』は、天心の最初のインド旅行におけるベンガル地方の民族意識高揚への連帯を示し、その覚醒と厥起をうながす、政治的な扇動文書であった。なかでも、そこに見られる、カーリー女神の破壊力への礼讃などは、あるいは『母なるカーリー』の著者ニヴェディータとの交友の、直接の果実だったのかもしれない。^[注6]

それでは、この原稿はなぜ、天心生前には発刊されなかつたのか。その理由は複雑だろう。まず、残された英文から判断して、これはなお定稿とは言い難い。とりわけ結論部はあまりに短く唐突であり、なお推敲を要するだろう。また内容からいつても、あまりに明け透けの政治的プロパンガンダの臭いが紛々としていて、当時英米の出版社でこのままの刊行が受け入れられたとは考えにくい。さらに、校閲者のニヴェディータに関してみれば、一九〇二年以降の彼女の活発な活動からして、もはやこれ以上、天心の原稿に時間を割く余裕などありえなかつた。逆にいえば、『東洋の覚醒』に先立つ『東洋の理想』は、ヴィヴェカーナンダの死の直後で、まだニヴェ

ディータが全面的な政治活動に突入する直前であればこそ、最適な校訂者を見いだし得た、とう希有な幸福の下に生まれた書物だつたことも納得される。

だが、『東洋の覺醒』の最大の問題は、つづく著作『日本の覺醒』（一九〇五）との関係だつただろう。天心は何故か日露戦争勃発の当日（一九〇四年二月一〇日）に横浜を発つて北米に向かつたが、同年十一月、ニューヨークのセンチュリー社より発刊された『日本の覺醒』は、もつぱら欧米の知識人や政治家にたいして、日露戦争に臨んだ日本の半島進攻を正当化しようとする、時局弁明の書物だつた。そして日露戦争後の日本は、帝国列強の仲間入りを果たし、台湾や朝鮮半島の「経営」が本格化し、一九一〇年には「朝鮮併合」が強行される。天心自身、もはや植民地下のインドの知識人たちとの連帯を歌い上げた革命の書物を出版できる立場にはない。つづく『茶の本』（一九〇六）では、「普通の西洋人たちは、日本が優しい平和の諸藝に沈専しているあいだは、日本のことと野蛮呼ばわりしていた。それが日本が満州の戦場で大規模な殺戮の拳に及ぶや、日本は文明化されたと言つてゐる」という痛烈な警句を飛ばすことになる。現実の国際情勢に先を越された晩年の天心。その彼の政治的挫折への諦念を、『茶の本』による美の世界への逃避、あるいは沈潜のうちに読み取ることもできるのであるまい。

天心をアジア解放の革命家として演出するのに陰ながら貢献したニヴェディータは、予期せぬ
破傷風のため、一九一一年、四十四歳で時期尚早の死を迎える。その最後の言葉は「か弱き小舟
はもう沈もうとしている。でもまだ日の出は見届けることができるでしょう」だった、と伝記作
家は伝える (Foxe 1975: 229)。そして彼女に遅れる」と一年、天心もまた一九一三年には、こ
れ尽くしました」との一節が見える。果たしてアジアに日は昇り、天心の事業のすべては「なさ
れ尽くした」のか。その検証には、また場所を改めねばなるまい (Inaga 1999-b)。ただ最後に
とりあえず確認しておこう。まず天心のインドへの旅が「母なるインダ」という形象発見の旅で
あり、それが祖国の再認識を導くものであつたことを。さらにインドという異国への憧憬が、
「アジアはひとつ」という観念、「虚構とはいえ、構造としてはその精髓をなすものといつてよ
い、有機的思考の連続性」 (Focillon 1925) を構想する契機となつたことを。そして最後に、こ
うした思索を育む媒体として、ジョセフィン・マクラウド、シスター・ニヴェディータといつ
た、「母」を体現する白人女性たちの姿があり、彼女たち自らが——ことの善惡、得失はとにか
く——東洋の思想家たちを促して、「東洋」の声を生ましめる産婆役となつたことを。

【注】

- 1 なお、ジョセフ・マクラウド、ヴィヴェカーナンダ、シスター・ニヴェティータと天心の関係や、そのインド旅行の詳細に関しては、堀岡弥寿子『岡倉天心——アジア文化宣揚の先駆者』一九七四年・吉川弘文館、『岡倉天心考』一九八一年・吉川弘文館が先駆的な研究だが、ニヴェティータの著作集などは利用されていない。本稿は堀岡氏の研究を補完するものである。
- 2 天心のセントライスでの講演には次の発言がみえる。

"Western society is not necessarily the paragon which all mankind should imitate. They [the Japanese conservatives] believe in the homogeneity of [Oriental] civilization, but that true homogeneity must be the result of a realization from within, not an accumulation of outside matter. To them, Japanese paintings are by no means the simple weapons to which they are liked, but a potent machine invented to carry on a special kind of aesthetic warfare" (Okakura 1984: 78).

芸術を宗教に、日本絵画をヒンディーズムに置き換えれば、立論の構図が、ヴィヴェカーナンダのシカゴ発言とされる文章に見いだされるのと同様のパターンをたどっていることは容易に納得される。さらにこれが、『東洋の理想』の最後の言葉、“Victory from within or a mighty Death from without”の敷延であることも明白だ。なお、ヴィヴェカーナンダと天心との関連については、中村忠男の口頭での発表（立命館大学言語文化センター主催のプロジェクトAII研究会、一九九六年一一月三〇日）に示唆を受けた。また小路田泰直『日本史の思想』（小路田 1998: 92-101）にヴィヴェカーナンダと天心両者の精神的同族性を見る提唱があるが、小路田の仮説には、なお論証の厳密さで問題が残る。ラマクリシュナ協会で現在発刊されている文章からシカゴ演説を復元することは、議論が転倒すること

ことになろうし、またそれを天心の文章の影響源と特定するならば、この操作も文献学的には強引の説りを免れないとからだ。

3 このニヴェディータの序文のインド美術史構築における意義については、Shigemi Inaga, "Tenshin Okakura Kakuzō comme inventeur de l'histoire de l'art oriental"（別途公刊予定）およびAASボストン大会（一九九九）発表の英文、またその邦訳、「理念としてのアジア——岡倉天心と東洋美術史の構想、そしてその顛末」『國文學』一〇〇〇年七月号、八月号、で詳しく述べたので、繰り返さない。

4 「母なるインド」については Katherine Mayo, *Mother India* (1927)

とそれへの弁護論 Harry H. Field, *After the Mother India* (1929) に端を発する論争が知られる。また Archanapuri Ma (1928-) はじめ、ベンガルの聖なる母の形象は枚挙に暇がない (McDaniel 1995)。近年でも、女神 Bharat Mata への信仰を母体とする政治団体が存在している (McKean 1996)。

5 その後付けは、現時点ではなお不完全であり (Mitter 1994: 262 sq には、岡倉と日本に関して初步的な誤謬が頻出する)、より体系的な研究が、今後の課題として残っている。

6 「東洋の覚醒」に「アジア民衆へのけしい革命的厥起のよびかけ」を見る視点はすでに色川大吉（色川 1967）にあるが、本論はその直感をより正確な文脈で検証したものといえる。なおいうまでもなく、天心の胸中にもつた読者——カルカッタのインド知識人エリート——と、色川史学にいう「民衆」との差異は明確にされる必要があろう。また『日本の覚醒』に関する以上の解釈は、脱稿後に参考できた岡倉古志郎氏の論文（岡倉 1987）とも、基本的に一致する見解であつた。この論文を含む岡

倉古志郎氏の貴重な著作は、その後、『祖父天心』として、中央公論美術出版から一九九九年九月、刊行された。あわせてご参考いただきたい。

* 本稿は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校における、天心ワークショップ（一九九九年一月）での英文発表の邦訳である。お招き戴いたワークショップ主催者、Fred Notehelfer教授に謝意を表す。なお、文献調査のうえで、長田俊樹氏の専門的指導と、置塙真理氏のご協力を得た。またベンガル語文献の解説には外川昌彦氏の助力を得た。記して謝意を表す。

文献表（アルファベット順）

- Atmaprana 1995: *Pravrajika Atmaprana, Western Women in the Footsteps of Swami Vivekananda*, New Dheli: Ramakrishna Sarada Mission.
- Benerji 1999: Debashish Benerji, "Homologies of Cultural Resistance in Turn-of-the-Century Japan and India: A Comparative Study of Okakura Kakuzo and Abanindranath Tagore," UCLA Workshop on Okakurta Tenshin, Jan., 22.
- Biswas 1994: Oneil Biswas, "The Significance of The Chicago Message and Its Relevance Today," in *Vivekananda* 1994, pp.194-210.
- Chakravarty 1975: Basudha Chakravarty, *Sister Nivedita*, New Delhi: National Book Trust.
- Focillon 1925: Henri Focillon, *Hokousai*, (2ème éd.) , Paris: Felix-Alcan.
- Foxe 1975: Barbara Foxe, *Long Journey Home, A Biography of Margaret Noble*, London: Rider and

Company.

後藤 [s.d.]：後藤末吉「天心とインド美術」茨城大学五浦研究所紀要、pp.84-101。

Guha-Takurta 1992: Tapati Guha-Thakurta, *The Making of A New Indian Art*, Cambridge: Cambridge University Press.

堀岡 1974 : 堀岡弥寿子『岡倉天心：アジア文化宣揚の先駆者』吉川弘文館

—— 1982 : 堀岡弥寿子『岡倉天心考』吉川弘文館

Inaga 1999-a: Shigemi Inaga, "Okakura Tenshin's Disciples and their Contemporaries in India," Workshop, Rethinking Okakura Tenshin UCLA, Feb.,22.

—— 1999-b: Shigemi Inaga, "Tenshin Okakura Kakuzō comme inventeur de l'histoire de l'art oriental" [to be published] (注3参照).

色川 1967 : 色川大吉「解説」「日本の名著」三九『岡倉天心』中央公論社

柄谷 1999 : 柄谷行人「美術館としての歴史」シラネ・ハルオ、鈴木登美（編）『創造された古典』新曜社 pp.302-365.

小路田 1997 : 小路田泰直『日本史の思想』柏書房

Jayaraman 1991: Lilitha Jayaraman, "Sister Nivedita's Vision of India," in M. Sivaramkrishna, Sumita Roy (ed.), *Perspectives on Ramakrishna-Vivekananda Vedanta Tradition*, Hyderabad: Sterling Publishers.

Kapoor 1999: Satis K. Kapoor, *Swami Vivekananda and the American Women*, Prabuddha Bharata, Vol. 104

- 春日井 1984 : 春日井真也『マヘンと日本——その光りと影』白華苑
- Ketelaar 1990: James Edward Ketelaar, *Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan: Buddhism and its Persecution*, New Jersey: Princeton University Press.
- 木下良英 1989 『龍の炎鑑：國會大心の内歴』洋書叢林
- McDaniel 1995: June McDaniel, "A Holy Woman of Calcutta," in Donald S. Lopez, Jr. (ed.), *Religions of India in Practice*, New Jersey: Princeton University Press, pp.418-425.
- McKean 1996: Lise McKean, "Bhārat Mātā, Mother India and Her Militant Matriots," J.S. Hawley and D. M. Wulff (eds.), *Devi, Goddesses of India*, Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, pp.250-280.
- Mitter 1994: Partha Mitter, *Art and Nationalism in Colonial India 1850-1922*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 鈴木 1967 : 鈴木信雄「明治十八年ナラバムの國會大心」; 1968『明治文部省集 国會大心集』筑摩書房
- Mukherjee 1997: Jayasree Mukherjee, *The Ramakrishna-Vivekananda Movement: Impact on Indian Society and Politics (1893-1922)*, Calcutta: Firma KLM.
- 中村 1996 : 中村忠則「ルハヌラー・バチャーラ・トコハルの形成と〈中村忠則〉」『社會思想文化研究』pp.67-86.
- Nivedita 1903: Nivedita of Vivekananda - Ramakrishna, "Preface" to Okakura Kakuzō, *The Ideals of the East* [see Okakura 1903].

- 1967: *The Complete Works of Sister Nivedita*, in 4 [6] vol., Calcutta, Ananda Publishers Private Ltd.
- 1968: *Nivedita Commemoration Volume*, éd. par Amiya Kumar Mazumdar, Calcutta: Vivekananda Janmotsava Samiti.
- 1975: *Sister Nivedita's Lectures and Writings*, Calucatta: Sister Nivedita Girl's School.
- 1982: *Letters of Sister Nivedita*, vol.1, vol.2, [vol.3], Calcutta: Nababharat Publishers.
- Notehelfer 1990: Fred G. Notehelfer, "On Idealism and Realism in the Thought of Okakura Tenshin," *Journal of Japanese Studies*, vol.16, Nr.2, pp.309-354.
- 森本 1989 : 森本辰雄「天心とイハニ」『文部』 pp.84-96.
- Okakura 1903: Okakura Kakuzô, *The Ideals of the East*; [岡倉1980]
- [1902] 1938 / 1940: Okakura Kakuzô, *The Awakening of the East*; [岡倉1980]
- 1905: "Modern Art from a Japanese Point of View," *The International Quarterly*, Vol.XI, No.2.
- 1906: Okakura Kakuzô, *The Book of Tea*, New York: Dover, 1964.
- 岡倉 1980 : 『岡倉天心全集』 in 8+1 vols. 平凡社
- Okakura 1984: Okakura Kakuzô, *Collected English Writings*, 3 vols. Tokyo: Heibonsha.
- 岡倉 1987 : 岡倉古治郎「天心とベニガルの革命家たち」『東洋研究』大東文化大学 pp.1-45; 1999; 『祖父天心』中央公論美術出版
- 99 大久保 1985 : 大久保齋樹『岡倉天心』小沢書店

- 大岡 1975： 大岡信『岡倉天心』朝日新聞社
- Prasâd Basu 1978: Sankarî Prasâd Basu, *Nivedita lokmâtâ*, (ISBN 81-7215-125-x)
- Prabuddhaprana 1990: Pravrajika Prabuddhaprana, *Tatine, The Life of Josephine MacLeod*, Calcutta, Sri Sarada Math.
- Roy 1995: Parama Roy, "As the Master Saw Her," in Sue-Ellen Case, et al. (ed.), *Crusing The Performative*, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, pp.112-129.
- Shand-Tucci 1997: Douglass Shand-Tucci, *The Art of Scandal: The Life and Times of Isabella Stewart Gardner*, New York, HarperCollins Publisher.
- Tagore 1936: Surendranath Tagore, "Okakura: Some Reminiscences," *The Visva-Bharati Quarterly*, Aug.-Oct. pp.65-72.
- 竹内 1966： 竹内好『日本とアジア』；1993 やくも学芸文庫
- 玉城 1965： 玉城康四郎『近代インド思想の形成』東京大学出版会
- Vivekananda 1992: *Complete Works of Swami Vivekananda*, Calcutta: Advaita Ashrama.
-
- 1994: *Swami Vivekananda: A Hundred Years Since Chicago, A Commemorative Volume*, Belur, West Bengal: Ramakrishna Math and Ramakrishna Mission.

*追補 なお佐藤志乃『近代日本画における「朦朧」の意味』筑波大学芸術学研究誌『藝叢』第一四号（一九九七）同「朦朧体とベンガル・ルネサンス」同第一五号（一九九八）および同「横山大観と菱田春草の渡印後の作品について」『芸術研究』第三号（一九九九）を見落としていた。本稿を補う

貴重な論考としてご参照いただきたい（二〇〇〇年六月一七日　追記）。

101 ジョセフィン・マクラウドとシスター・ニヴェディータ

いこく　　しょうけい　そこく　　かいき
異国への憧 憧と祖国への回帰

平成12年9月17日 印刷
平成12年9月22日 発行

©2000 Sukehiro Hirakawa
Printed in Japan

編 者 ひらかわ すけひろ
平川 祐弘

発行者 株式会社 明治書院
代表者 三樹 讓

印刷者 精文堂印刷株式会社
代表者 西村正彦

発行所 株式会社明治書院
東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101-0054

電話 03-3292-3741 FAX 03-3292-4429

郵便振替 00130-7-4991

ISBN4-625-65300-2 製本 星共社
カバー・扉デザイン 阿部壽